

俳句誌

三月号



花鳥諷詠

3月号 (456号)

日本伝統俳句協会

花鳥諷詠®

令和8年3月 ■ 第456号 ————— 目次

第三十七回日本伝統俳句協会賞 2

協会賞	「祇園祭」	藤井 啓子
新人賞	「日の匂ひ」	菅谷 糸
協会賞佳作	第一席 「春夏秋冬」	大橋美代子
	第二席 「浅草ごよみ」	守谷 一剣
	第三席 「祭」	名木田純子
	第四席 「よりそふ」	石田 裕美
	第五席 「薪能」	渡部 全子

花鳥諷詠選集 今井 肖子10 吉井たくみ12

この人の作品 山下しげ人15

一頁の鑑賞 藤森 荘吉16
渡辺 檀17

『虚子俳話録』研究 (3) 前北かおる18

鎌倉だより

鎌倉の虚子をたずねて -その三- 長谷川槇子20

卯浪22

風報24

地区行事開催日程表26

公告 令和八年度事業計画と予算書27

編集後記32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

表紙 川端龍子「桑港」(「ホトトギス」大正2年7月号)

花鳥諷詠選集

今井肖子選

特選五句

大綿のうすむらさきを見失ふ

行田 細村 雅子

落葉踏む音の晴れたりくもつたり

芦屋 田村 惠津子

星凍てて昔むかしの光り合ふ

成田 小川 笙力

数へ日の一服に書く葉書かな

札幌 高見 慧子

時々傘をたたみて行く花野

鹿児島 西村 セツ

二句短評

一句目——見失われやすい大綿ですが、一般的には白という印象です。しかし確かに淡く青みがかった灰色にも見え、うすむらさきという静かな表現が凍雲の暗い灰色と呼応して冬空らしさを感じます。

二句目——落葉道という音を立てて踏みながら歩きたくりますが、乾いている時、雨上がりなど音も様々ですね。「くもつたり」をひらがなにしておいて、天気のみならず心情も少し滲ませて佳。

入選六十句

冬ざれの野に一筋の獣径 鳥取 山口 博

となりあふ男の肘や温め酒 鳥取 石尾 正子

大根を要るだけ引けと言はれても 久留米 平岡 清志

由緒ある湯屋の厠の隙間風 稲沢 山田ひふみ

虫眼鏡出して初霜見てゐる子 徳島 遠藤 和良

朝寒を解く薄日の御苑かな 姫路 黒田千賀子

梁ひとつ鳴いて旧家の隙間風 大阪 上西左大信

そばに居るだけのぬくもり冬に入る 浜田 三沢 孝子

峡宿の炉火てらてらと夜を通す 高崎 清水 教子

風除も夕日の色でありにけり 白岡 小林カヨ子

浮く鳩を待ちゐてひとり残さるる 福岡 山口 裕子

悴みて言葉尖つてしまひたる 高松 白根 純子

空風の吹き鎮まりて夜の沼 成田 川名部さと志

海に沿ふ車窓明るき小春風 徳島 吉田 有子

風変はり波音変はり寒さ急 輪島 向 佐子

どの窓も光こぼしてクリスマス 横浜 黒山 敏恵
 駅を出て一人となりぬ冬の星 香川 福家 市子
 古民家の柱に縋るいぼむしり 糸島 春田美智子
 旅先の小さき待合みかんむく 熊本 矢澤 幸乃
 熊穴に入るを待つしかなき暮し 能美 北 重子
 閉店を惜しむ民宿竹瓮干す 阿南 鎌田 黄鳥
 海光の磨く半島冬ざるる 名古屋 幅 みや女
 ひたむきな冬耕に声掛けそびれ 高松 久本 照代
 呼び鈴にしばし間のあり風邪の声 福岡 梶原 敏子
 日溜りの杭にふくらむ都島 狭山 鈴木謙二郎
 電飾のなほも煌めく寒さかな 高松 渡部 全子
 どちらかと言へば寒さの方がまし 伊賀 子日 康子
 絶筆の友の賀状を読み返す 福岡 森田寿美子
 枯蓮の百態の景暗からず 東大阪 中田 豪起
 日の欠片叩き叩きて秋耕す 松山 渡部美恵子

装ひに光るものつけクリスマス 高槻 林 曜子
 白菜を煮てあつけなき嵩となる 芦屋 長安 悦子
 糯藁の青さ称へて注連を綯ふ 東京 不破 澄子
 絵馬に絵馬重ね天満宮小春 町田 小森まさひこ
 並び買ふあんパンひとつ暮早し 鹿児島 手打 桃果
 新妻の味は洋風大根炊く 兵庫 清水貴美代
 風湧きて御神木へと降る木の葉 長久手 鈴木登志子
 音無くて雨の重さの落葉掃き さいたま 池澤はるを
 底冷の部屋に着替ふる喪服かな 西宮 山谷 彰子
 冬の朝始発電車は仄暗く 亀岡 井内 房子
 空箱に空箱収め十二月 八王子 沼田 博古
 熱爛や忘れたきこと忘れず 倉敷 木村英一郎
 誰も居ぬ日向があれば日向ほこ 高松 肥塚 英子
 雑念のふと大綿を見失ふ 西尾 沢井 真弓
 熊穴に賑はひ戻る夜の街 東京 大原 栄子

カーテンの裾のかすかや隙間風 十日町 小川のおこ

水音の奥灯しをり冬紅葉 倉敷 田口ひさえ

逆光に浮かぶひとむら枯尾花 東京 毛利 律子

朝光を散らして鴨の目覚めかな 横浜 秋吉 斉

白日のがらんどやなり蓮枯るる 倉敷 中田 鈴江

落ちさうで落ちぬ大岩滝涸るる 高松 金澤 正恵

竹を編むむひご堆く冬構 千葉 藤田 考成

音零れさう大空の金鈴子 松山 門田 智子

雲割れて日の眩しさを鷹渡る 阿南 湯浅 芙美

風に伏す枯野一面なる日差 高松 永森ケイ子

白き歯を当てて林檎の音となる 鹿児島 蓑輪ムツ子

古本屋の奥の火鉢に主ゐて 八尾 藤井ケイ子

その中に点滅ゆるき聖樹かな 熊本 吉田 潮

炭ついで灰美しく均したる 熊本 粟津 玲子

白もまたあたたかき色クリスマス 東京 飯島 千青

● 吉井たくみ 選

特選五句

変りゆく暮しにひそと枇杷の花

神戸小柴 智子

神留守の確かなものに海の紺

袋井湖 東 紀子

一灯で足りる暮しや冬ごもり

香川三宅 久美子

日記買ふ愉しき余生描きたく

神戸上岡 あきら

肩書の無き身の自由冬堇

福岡山 永 多恵子

二句短評

一句目——世の中どんどん便利になり、自分の暮し向きも年々変わってきたが、今年も枇杷の花がひっそりと咲き始めた。作者には、控え目だが凜として変わらぬ心持があるが、これから先も大切にしていきたいとの思いが強い。

二句目——神の留守には産土神の御利益も薄れ、見るものもどこか頼りなく感じられてしまう。そんな中でも、紺碧の海だけはいつもと同じように我々を見守ってくれているというのだ。

入選六十句

結願の寺や紅葉の散り敷けり 大阪 ふじもと言葉

宮居して正座崩さず注連作 米原 成宮 伯水

選り抜きて和菓子盛りたる柿落葉 福岡 深瀬 直治

スコーンにジャムをたつぷり漱石忌 東京 目黒 琴音

虫眼鏡出して初霜見てゐる子 徳島 遠藤 和良

戻れば浅き眠りの鴨の首 東京 荒井 桂子

初産の牛を見守る冬の月 福島 今野 成子

この先は神慮のままに老の春 神戸 田中あかね

舟唄も水に映ゆるや白秋忌 大牟田 猿渡 章子

恙なく年の瀬迎へ豆を煮る 総社 剣持 章子

寄せ鍋やみな健やかに三世代 八王子 小町谷滋子

冬籠会話のやうにする読書 高知 岡林知世子

どの窓も光こぼしてクリスマス 横浜 黒山 敏恵

落葉踏むしみじみ想ふことばかり 姫路 高島規容子

新海苔の香り広ぐる朝餉かな 守山 菅 邦子

姫を舞ふ男の子のうなじ里神楽 福山 佐藤 浩子

落葉踏む音の晴れたりくもつたり 芦屋 田村惠津子

来るといふ人を待ちゐる冬の月 熊本 井芹眞一郎

木枯や夜空の星を研ぎ澄ます 野々市 吉田 正則

大戦と母の青春聞く小春 神戸 澤田 鈴子

へプバーン憧れし日の冬帽子 神戸 岩水ひとみ

手早さが勝負一氣に餅を伸す 白山 大橋美代子

落葉掃く音も一景園巡る 高松 岡田 貞幹

冬ぬくし鯉に餌をやる車椅子 福山 小林 翠子

百年を誇る老舗の冬紅葉 羽生 蓮見由美子

畢竟は独りなりけり冬銀河 福岡 今中 榮泉

思ひきり髪を短くして小春 名古屋 内藤 信子

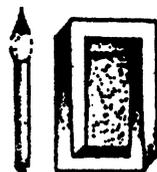
少年は冬耕の父を追ひ育つ 大野城 岡井 由里

柀の花の香ひそとある日向 熊本 山本 淑子

うす青く野の匂ひして干菜風呂 日置 帯田なづな

老どちの医者評定や日向ほこ名古屋 山口 勝行
 糯藁の青さ称へて注連を緬ふ 東京 不破 澄子
 負真綿祖母の行李は玉手箱 柏原 鈴木 輝子
 黄金町次は白銀パス小春 下関 中村 元代
 絵馬に絵馬重ね天満宮小春 町田 小森まさひこ
 大釜に息災祈り大根焚 草津 田中 幸湖
 毛蟹食ふ政など脇に置き 神戸 松元 一師
 話すにはほどよき明り白障子 仙台 赤間 学
 新妻の味は洋風大根炊く 兵庫 清水貴美代
 熱爛や恙無く生き八十年 名古屋 住田 征夫
 白鳥の田の上低く六七羽 上山 立花 厚子
 等伯の直筆壁画冬座敷 大阪 小林 伸子
 こんと割る命の重み寒卵 札幌 押野 美江
 冬帝を逃れ酒客となりにけり 大牟田 本田 守親
 神棚の榊新たに神迎 宇部 縄田 悦子

叡山の読経沁みいる冬の朝 愛知 中田 恵子
 炉開の席入りを待つ躰口 高松 池田 裕子
 くす玉を割りたるごとく銀杏散る 福岡 橋口 貴美
 あをあをと空を配して冬木立 熊本 武藤 たみ
 逆光に浮かぶひとむら枯尾花 東京 毛利 律子
 父母兄の齢を越えて年用意 加賀 牧野 妙子
 遠景に比良近景に鴨の湖 吹田 生澤 瑛子
 落ちさうで落ちぬ大岩滝涸るる 高松 金澤 正恵
 凍雲や朝の連山隠しをり 芦屋 山岸 正子
 どちらかと言へば小振りの蜜柑好き 神戸 内田 泰代
 あんかうのどこか憎めぬ不恰好 福岡 森 順子
 元氣よくかはす挨拶息白し 西予 西川キヌエ
 笹鳴や写経のごとく句を写す 千葉 駒井ゆきこ
 炭ついで灰美しく均したる 熊本 粟津 玲子
 喜怒哀楽すべて受け止め日記果つ 筑紫野 馬場三知子



編集後記

ひらきたる春雨傘を右肩に

星野立子

「ひらきたる」で始まり「右肩に」で終わる倒置法で余韻を持たせた。「に」止めは無造作に使うと失敗しやすいが、「ひらきたる」は、「傘を開く」と同時に春の暖かさに「心を開く」ような感じもして、斜めに傘をさす女性の優美なしぐさが彷彿とする。濡れてもかまわないくらい「春雨」だからこそ、「右肩」に自然とあたる。浮世絵や歌舞伎でも、傘を使った動きや立ち姿が焦点となるものは多い。

こととなります。

●協会賞の応募は全体として若干数が減りましたが、昨年は出せなかった新人賞が決まったことは何よりでした。選者評は来月号に掲載します。

●以下の講座を開きます。

オンライン講座

「次の協会賞を目指して」

開催日：二〇二六年三月十五日（日）

二十時～二十一時

参加費：千円（税込）

対象：協会員

申込み：協会HPからチケット（税込

千円）を購入してご参加ください。

講師：井上泰至氏（協会会長）

①選考プロセスの紹介

②応募の注意事項（誤字、用字法、文法についての一般的注意。確認作業、

参考書の紹介等）

③タイトルのつけ方や句の配列についての一般的注意

④句の文体や季題の詠み方についての一般的注意と参考書

⑤質疑応答

後日録画配信、要点は本誌でも活字化の予定です。

●今月号を以て、編集後記の執筆を終えることになりました。編集長は続けますが、この欄の執筆は副編集長の前北かおる氏と交代いたします。丸三年、お付き合いくださり、ありがとうございます。心より御礼申し上げます。（井上泰至）

花鳥諷詠三月号（通巻第四五六号）

定価一、二〇〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和八年三月一日

発行人 井上泰至

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二丁目八九

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

定休日 水・土・日・祝

郵便振替 口座番号 〇〇二六〇七七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一丁目一九二